

盛岡におけるホワイトリボン・キャンペーンの試み

Building Awareness of Violence against Women: Our White Ribbon Campaign in Morioka

熊本早苗*

Sanae KUMAMOTO

Keywords: gender equality, violence prevention, White Ribbon campaign

ジェンダー平等, 暴力抑止, ホワイトリボン・キャンペーン

1. 背景および目的

ジェンダー平等は女性だけの問題ではなく人権問題となり得る。国連開発計画 (UNDP : United Nations Development Plans) が加盟国において 2016 年から 2030 年までの 15 年間で達成すべき「持続可能な開発目標」(SDGs : Sustainable Development Goals) として 17 項目を掲げている。その中の目標 5「ジェンダーの平等を達成し、全ての女性と女児のエンパワメントを図る」(Achieve gender equality and empower all women and girls) がある。

女性に対する暴力については、1993 年、国連総会において「女性に対する暴力の撤廃に関する宣言」が採択された。それによって、世界中における行動枠組が示された。しかし、現在でも、UN Women のデータによると、女性の約 3 人に 1 人が、身体的あるいは性的暴力を経験している。国連加盟国 195 カ国のうち、143 カ国においては憲法で男女平等が保障されている。しかしながら、ジェンダー差別は経済や政治、教育や社会規範の中にいまなお存在している。

ホワイトリボン・キャンペーンとは、女性に対する暴力をなくすため、男性が主体となっている取組である。「リボン」が名称につく意味は、市民主体のアクティビズムの一種であることを示す。2019 年時点で、約 60 カ国においてホワイトリボン・キャンペーンは展開されている。

日本においてホワイトリボン・キャンペーンが紹介された背景には、男性主体の女性に対する暴力をなくす活動団体を創設したマイケル・カウマン (Michael Kaufman) が 2001 年に来日したことが大きい。講演「男たちのノー・モア・VAW (Violence against Women)」を直接聞いた男性学の研究者たちが中心と

なって、男性が主体的に女性に対する暴力防止に取り組む活動が始動した。その後、契機となったのは、2012 年、内閣府男女共同参画局がイギリスにおけるホワイトリボン・キャンペーン実践者クリス・グリーン (Chris Green) を招聘し講演会したことである。「女性に対する暴力との闘い—英国と欧州での取り組みから」と題された講演において、グリーンは、女性に対する暴力をなくすためには、女性だけではなく男性とともに取り組む必要性を力説した。その後、兵庫県、神戸市、関西大学、京都大学が中心となり、2013 年に「ホワイトリボン・キャンペーン・KANSAI」(WRCK) が創設された。

女性に対する暴力をなくすため、より広義の目的としては、ジェンダー平等のために、若い世代は何ができるのだろうか。盛岡短期大学部国際文化学科において今年初開講となった「ジェンダー論」では、国際社会とジェンダー平等の動きについて調査した。そして、日本におけるホワイトリボン・キャンペーンの先駆者である多賀太、伊藤公雄、安藤哲也共著『男性の非暴力宣言—ホワイトリボン・キャンペーン』(2015) を支流とした。その成果を発表すべく、「いわて男女共同参画フェスティバル 2019」初のユース部門へ応募した。

岩手県男女共同参画センターによる審査を経て、私たちは「ホワイトリボン・キャンペーンを学ぶ会@MJC」としてパネルディスカッションを開催した。本報告では、「いわて男女共同参画フェスティバル 2019」に参加した学生達が、「女性に対する暴力」や「男性学」について考察した取組を報告する。それは、パネル展示という対話型形式を用いて、展示者 (本学の学生) と来場者が、ともに非暴力・人権・当事者意識について考えを深めた機会となった。

* 国際文化学科

2. 開催内容

2-1. いわて男女共同参画フェスティバル 2019

岩手県男女共同参画センターが主催の「男女共同参画フェスティバル 2019—スポーツと男女共同参画」に学生 33 名が参加した。開催内容は以下のとおりである。

開催日時: 2019 年 6 月 15 日 (土)

開催場所: いわて県民情報交流センター (アイーナ)

4 階県民プラザ (「復興バザー」同時開催)

開催テーマ: 「女性に対する暴力の根絶」

パネル展示の形式: パネルディスカッション

パネル展示のタイトル:

「国際社会におけるホワイトリボン・キャンペーンと私たち」

参加人数: 展示担当 33 名

来場者 約 53 名

運営体制: 代表者 熊本 早苗

「ジェンダー論」履修学生 33 名

団体名: ホワイトリボン・キャンペーンを学ぶ会 @MJC

2-2. ユース部門でのパネル展示

パネル展示は 3 部構成から成る。第一部は、国連データに基づく「女性に対する暴力」の基本情報 (現状認識) と、女性に対する暴力に取り組む男性主体の「フェアマン」(Fair Man) の主旨である。

第二部は、当団体 (ホワイトリボン・キャンペーンを学ぶ会 @MJC) による“Hands On! White Campaign”プロジェクトである。これは、学生各自が「ジェンダー平等」について授業内で学んだこと、およびこれからジェンダー平等社会を実現するために各自が取り組みたいことを書きだしたものである。一人ひとりの個性を出すために、カラフルな色画用紙を用いた。右手には、各自が最も重要と捉える「ジェンダー平等への課題」を記した。左手には、それらの課題を解決すべく実践したい取り組みを記した。皆のカラフルな手形メッセージが示しているのは、女性や男性への「非暴力」宣言であった。すなわち、暴力に訴えず、別の方法で問題を解決しようとする意思の表れである。

第三部は、当団体の分科会 (学生グループ) による個別具体的な課題設定テーマに基づく学修成果報告である。テーマごとに 7 グループにわかれ、A4 判で 1~2 枚にまとめた。形式

は自由とし、「ジェンダー平等」「女性に対する暴力」から着想を得て、オリジナル創作画を描いた者もあり、文字パネルに限らない形式での展示となった。

2-3. 展示内容と参加者間交流

ユース部門出展の目的は、実際に活動しているアクティヴィストや支援者 (支援団体)、そして長年、ジェンダー平等に取り組んでいる方々との意見交換にある。現状を把握し改善すべき点を見つけ出すため、参加者アンケートをとった。ホワイトリボン・キャンペーンについて聞いたことがあるか (知っているか)、女性に対する暴力についての意見について、任意での選択式と口頭での自由論述式とした。パネル展示への来場者は大体が何らかの男女共同参画にかかわる団体のメンバーであったことから、意識の高い方が多かった。選択式回答では 53 名から回答があった。自由論述式では、10 名ほどの参加者との意見交換ができた。特筆すべきは、こうした意見交換によって学生は学内では学べない事柄を多く学ぶことができた事実であろう。

パネル展示を説明する学生は、シフト制を組み、午前 10 時から午後 3 時までの時間帯での交代制をとった。したがって、どの時間帯にも来場者は訪問可能で、質疑応答の時間も十分に確保できた。

当日はメイン会場において基調講演「スポーツから考える男女共同参画」(講師: 筑波大学体育系教授 山口香氏) や 6 つの分科会が同時開催されていたことから、岩手県内外から多様な方々の来場が見られた。敬意を込め、それら分科会およびパネル展示のタイトルを紹介したい。

<同時開催されていた分科会>

- ・「女だから」「男だから」得？損？
- ・ご存知ですか？ダブルケア
- ・わたしとレインボーな仲間たち
- ・私にもできる！人と人とのつながりを活かした復興支援の事例紹介～福島県浜通りでの実践例～
- ・映画上映会「飯館村の母ちゃんたち—土とともに」
- ・男女共同参画による地域防災力の向上

<同時開催されていたパネル>

- ・東日本大震災からの復興

- ・防災と岩手の女性の経験と知識
- ・自分も相手も大切にすることを
- ・人と人とのつながりを活かした復興支援の事例紹介
- ・岩手県男女共同参画推進月間ポスター
- ・デートDV防止啓発パネル
- ・LGBTに関する啓発パネル

時間帯によっては、基調講演や他の分科会に多くの来場者が集まることもあったが、当団体の学生もそれらの分科会に参加しつつ、他の関係団体と交流を図った。ホワイトトリボン・キャンペーンに関する紹介ファイルを持ち歩きながら、自分たちのパネル展示へ誘い、当該会場にまで集ってもらえるように積極的に声掛けを行っていた。その際、認知度があまり高くないホワイトトリボン・キャンペーンについて簡潔に説明し、第三者に分かりやすく、かつ興味をもってもらえる工夫が必要であった。このように学生が積極的に参加者間交流を促進した経験は、より主体的な学びにつながったと思われる。

私たちが多様で多層的なホワイトトリボン・キャンペーンをシンプルに伝えたいとき、「ホワイトトリボン・キャンペーン・ジャパン」から「フェアメン」3か条を引用した。その3点とは、①耳を傾ける、②暴力に依存しない（暴力で解決しない）、③相手も自分も大切にすること、という項目である。暴力という慣習から男性を、そして女性を解放するために、この3か条は効果的であると考えられた。歴史を辿れば、人類は暴力の連鎖を重ねてきた。だからこそ、男性と女性の対等な関係性、さらには人間同士の共生のために、女性や子どもへの暴力を選ばない男性のポジティブ・アクションは必要となる。

意見交換の際には、なぜ男性がかかわる必要があるのか、という質問もあった。学生たちは、大多数の男性が自分は暴力に「無関係」だと考えやすいことを指摘した。その大多数の「自分は問題ない」と思う男性たちが行動することによって、社会は変わっていく。もちろん暴力行為を咎め、更生させる取組は重要である。一方、ホワイトトリボン・キャンペーンは、＜非暴力系男子＞を増やす取組といえる。学生たちは、暴力を振るわない大多数の人たちが、女性への暴力をなくしていく鍵になると考えた。そして、ホワイトトリボン・キャンペーンとは、他者に対する暴力を、「振

るわない」「許さない」「沈黙しない」ことだと発信していた。

「ホワイトトリボン・キャンペーン・ジャパン」は公式見解として次の5つのミッションを掲げている。それは私たちがパネル展示において目的としたミッションである。

1. 決して暴力を振るわないことを誓う
2. 女性への暴力は社会全体で解決すべき問題であることを理解する
3. 女性への暴力をなくすために責任をもって行動する
4. 女性への暴力をなくすために活動している女性たちの力になる
5. 上記1から4を遂行する男性を増やしていく

3. ジェンダー平等への意識

3-1. 非暴力への国際社会の動きと若者世代

パネル展示を通して、私たちは国際社会の非暴力への動きについて調査した。そして、女性のみならず、男性に対する暴力も、その人格を否定し、人権を侵害する行為であると考えに至る。

国連は、Spot Initiativeという取組において、フェミサイド(女性殺し)、性暴力、近親者間暴力、人身取引、有害な慣習など、女性と女兒が不当に多くの暴力にさらされていることを提示している。国際社会は、若者世代を対象に、非暴力の概念を推進している。2018年、第62回国連女性の地位委員会(CSW)は、『スポットライトの下で—すべての女性と女兒に対する暴力に終止符を』と題した分科会を開催している。参加した発言者たちは、性差別が複合的形態であると認識している。そして、「誰ひとり置き去りにしない」暴力対策を訴えている。

世界中の人々が暴力を受けずに安心してらせるようにするため、私たちは世界市民として何ら化の行動を起こす時だと考えた。ホワイトトリボン・キャンペーンは、加害者でも当事者でもない大多数の男性に、「他人事」ではない事実を示し、非暴力系若者を育成するアクションの1つになり得る。持続可能で、ジェンダー平等な社会を実現するためにも、若者の柔軟な発想力は重要である。

3-2. 多様性から創造性へ

ジェンダー平等を追究する過程において、私たちはLGBTQへの認識を深めていった。そもそも、「男らしさ」「女らしさ」とは何かについて議論を深めていった。そして、パネル展示の後には、「多様性は創造性を生む」という発見を得たように思う。パネル展示内における各グループの発表に対して、来場者の方は着眼点の多様性を評価していた。「女性に対する男性による暴力」を抑止する目的からスタートしたホワイトリボン・キャンペーンであるが、その要因を調査していくうちに、パネル展示後は、「男性に対する女性による暴力」についても考察するようになった。そして、暴力は身体的暴力だけではない。心理的な暴力、経済的な暴力、社会的な暴力等はもちろん、ジェンダー（社会的性）に基づいた暴力があることに学生たちは気づく機会となった。

3-3. White Ribbon から Marble へ

誰もが暴力に怯えることなく、暴力に依存することなく安心して暮らせる社会は、誰にとっても生きやすい社会ではないだろうか。不平等に苦しめられることなく、自分らしく生きられる社会は、多くの人にとっても暮らしやすい文化をもたらす。本報告においては、「ホワイトリボン・キャンペーンを学ぶ会@MJC」としてパネル展示と参加者交流から学んだ事柄をまとめた。そして、「いわて男女共同参画フェスティバル2019」への参加を経て、「行動を起こす」ことの重要性に気づいた本学の学生たちは、ジェンダー平等やLGBTについて考える学生サークル「Marble」を創設し(2019年)、今も岩手県立大学で活動を継続している。

1つの授業や課外活動イベントだけで完結せず、学生自らが主体となって社会を理解し、変えようとする取り組みに、今後も期待をしたい。

謝辞

パネル展示にご協力いただいた関係各位、そして機会を提供して下さった岩手県男女共同参画センターの皆様
に深く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) UN Woman
<https://www.unwomen.org/en/digital-library/>
- 2) UN Spotlight Initiative
<https://www.un.org/en/spotlight-initiative/index.shtml>
- 3) 多賀 太・伊藤 公雄・安藤 哲也(2015)『男性の非暴力宣言——ホワイトリボン・キャンペーン (岩波ブックレット)』岩波書店。
- 4) 伊藤 公雄・牟田 和恵 (2015)『ジェンダーで学ぶ社会学』世界思想社。
- 5) Flood, Michael. (2019) *Engaging Men and Boys in Violence Prevention*. New York: Macmillan.
- 6) Kaufman, Michael. (2011) *The Guy's Guide to Feminism*. New York: Seal Press.